

ルター聖書における接続法の

統語論的考察（Ⅲ）

工藤 康弘

前稿では、ルター訳福音書において、接続法が義務的に近い役割を担っている統語環境として、非現実的条件文、要求話法、外交的接続法、除外文を扱った¹⁾。本稿では、接続法が必ずしも義務的ではないと思われる統語環境のうち、主語文、比較文、非現実的比較文、bis文、ehe文、目的文を取り上げ、そこに現われる接続法、直説法、modusambivalentな語形²⁾の関わりあいを考察していく。このうち目的文に関しては、文の抽出にあたって問題点が多く、他と比較して多くの紙面を割くことになった。

主語文

主語文と接続法の関係については、多くの研究者が指摘している。たとえば Dal (S.145) は次のように述べている (傍線筆者)。

In daß-Sätzen, die als Subjekt des Hauptsatzverbs fungieren, steht potentialer Konjunktiv, wenn der Inhalt als nur gedacht oder möglich zu verstehen ist...Hier steht im Mhd. beinahe immer Konjunktiv,...In der modernen Umgangssprache verwendet man Indikativ.

このようなことから、同じ主語文でも、たとえば Es freut mich, daß... のような文には直説法が現われ、Es ist gut, daß... のような文には接続法が現われるという傾向も理解される。工藤 (1985) において、接続法が用いられた主語文の形式を見てみると、Es ist besser / gnug / recht / leichter / möglich / fein, Es thuts nicht のように評価を表わすもの、および Es ist zukünftig / furhanden (=bevorstehend), Es wird geschehen, Es ist der Wille のように、未来や意図を表わすものに限られている。本稿で主語文を抽出する際も、今述べた形式を基準にしており、その枠からははずれるものは除外している。たとえば、ルター訳福音書に頻繁に現

われる Es begab sich, das... は、直説法が用いられた主語文の大半を占めている。これはヘブライ語法にならった³⁾ギリシャ語 ἐγένετο, ラテン語 factum est のドイツ語訳であるが、冗語的な表現であり、次の例に見られるように、Es begab sich だけが孤立してしまっていることすらある。

- (1) Es begab sich aber, da die zeit erfüllet war, das er solt von hinnen genomen werden, wendet er sein angesichte stracks gen Jerusalem zu wandeln,...

(ルカ 9—51)

また Es begab sich, das... は、性質上も Es ist gut, daß... のような文とはまったく異なっており、本稿での考察の対象とはならなかった。

以上のようなことを考慮した上で、主語文に現われる動詞の Modus を調べた結果が次の表である。数字は語形の数を示す。

表 1 主語文における Modus

Konj.	Amb.	Ind.
24	15	1

Amb. のうち 1 つは、Amb. I と Amb. II の区別がつかない語形 (geben) で、あとはすべて Amb. I である。直説法が少ない点、ルターのドイツ語は中高ドイツ語に近いと言える。

比較文

比較級のあとに denn または denn das によって導かれた副文について、そこに現われる動詞の Modus の頻度は次のとおり。

表 2 比較文における Modus

Konj.	Amb.	Ind.
17	0	2

非現実的條件文と重なっている Amb. の例が 2 つあり、これは非現実的條件文として扱っている。比較文の Modus については、古来、主文が positiv な意味のときは接続法、主文が negativ な意味のときは直説法が用いられるという規則があった⁴⁾。この規則が中高ドイツ語時代からすでに崩れ始め、直説法が浸透していく。ルター訳福音書に現われる接続法の例は、ほとんどが Es ist besser (leichter), das..., denn das... の形式であり、上述の規則に従えば、接続法の統語環境である。表 2 を見る限り、ルターにおける比較文は、接続法の統語環境としての機能をまだ保っていると言える。

非現実的比較文

中高ドイツ語時代から新高ドイツ語時代にかけては、比較文の形式が変動しており、非現実的比較文（いわゆる als ob 文）と他の比較文を接続詞によって区別するのは、必ずしも容易ではない。さしあたって本稿では、wie, als (= wie), gleich wie, gleich als (= wie) で導かれ、定動詞が後置された文、および also (= so), das... の文を考察の対象からはずした。その結果、Modus の頻度は次のとおり。

表 3 非現実的比較文における Modus

Konj.	Amb.	Ind.
5	2	1

接続法と Amb. の文は、als + 定動詞 + 主語の形式である。直説法の文は als wenn で導かれている。また als や wie で導かれた定動詞後置の文に、接続法 2 式が用いられた例も報告されており⁵⁾、今後資料を増やして、よりはっきりした統計的な結果を得ることと、比較文全体について、より詳細に吟味することが必要である。

bis 文

bis または bis das に導かれた文における Modus の頻度は次のとおり。

表4 bis文における Modus

Konj.	Amb.	Ind.
17	29	9

Behaghel (S. 620f.) は、bis 文に現われる接続法を、目的文との類似等、他の要因に求めようとし、Paul (1968, S.299) は、bis 文の内容がすでに起こったものか、これから起こるものかで Modus が決定されるとしている。いずれにせよ、Modus に関して不安定な性格は、表4にも現われている。しかしながら、現代語では bis 文において、直説法が支配的であることを考えたとき、表4に見られる接続法の高い頻度は、ルターのドイツ語が古い言語段階にあることを物語っている。

ehe 文

ehe または ehe denn に導かれた文における Modus の頻度は次のとおり。

表5 ehe 文における Modus

Konj.	Amb.	Ind.
1	3	16

ehe 文における接続法の使用は、中高ドイツ時代ですでに後退し始め、新高ドイツ語では、接続法はほとんど用いられなくなっている⁶⁾。このことは、上の表にも現われている。これを見る限り、ルターにおける ehe 文は、もはや接続法の統語環境ではないと言える。

目的文

目的文を導く接続詞として、das, auff das, damit があるが、これらが一義的に目的文を導くとは限らない。まず三者とも、関係詞としての機能を合わせて持っているが、主として問題となるのは damit である。そもそも目的文を導く接続詞 damit は、手段を表わす関係詞から生じたものであり⁷⁾、さらにルターが関係詞

として、womitよりもdamitを多く用いていることから⁸⁾、目的文と関係文は容易に区別できないこともある。たとえば次の文を見られたい。

(2) ...vnd trucknet sie mit dem schurtze, damit er vmbgurtet war.
(ヨハネ13-5)

(3) ABermal ist gleich das Himelreich einem netze, das ins Meer geworffen ist, da mit man allerley Gattung fehet.
(マタイ13-47)

(4) Alle sünde werden vergeben den Menschenkindern, auch die Gotteslestern, damit sie Gott lestern.
(マルコ3-28)

(2)の場合は、時間的に副文の内容が主文の内容に先行することから、目的文でないことは明らかである。(3)の場合は、下線部が目的文なのか、netzeに対する関係文なのか、あいまいである。(4)の場合、副文は名詞 Gotteslestern と関わっており、Adverbialsatzとしての目的文とは考えられない。ちなみにギリシャ語およびラテン語聖書では、(2)(4)に対して関係代名詞が用いられている。(3)に対しては、網を説明する能動分詞 (*σαγῆντ...συναγαγούσῃ*, *sagenae...congreganti*) で表わされており、関係文に書き換えることができる。結局、以上の3つのdamit文は、いずれも関係文とみなした。

次の文を見られたい。

(5) Die zeit ist komen, das des menschen Son verkleret werde. (ヨハネ12-23)

このdas文は、工藤(1985)において目的文に分類されている。しかし、前述の例文(3)とも関わってくるが、das文はzeitを修飾する付加語文とも考えられる。もっともその場合は、接続法werdeの説明が難しくなる。Es kommt die Zeit, daB...のタイプの文は、たとえばヨハネ4-21, 16-2, 16-25, 16-32, 17-1などに見られ、副文には直説法またはAmb.が用いられている。これらに対応するギリシャ語はὥρα ἵναまたはὥρα ὅτεとなっている。ἵναに関して岩隈(ヨハネ下, 34ページ)は、ὥραを限定する不定法の代用とし、ὅτεやἐν ᾧといった関係詞と類似のものとみなしている。一方ラテン語では、ὥρα ἵναにはhora utが対応し、ὥρα ὅτεにはhora cumまたはhora quandoが対応している⁹⁾。この

ようなことから本稿では、Es kommt die Zeit, daß... のタイプの文を目的文から除外して、論を進めていくことにする。

さて、接続詞としての das は、副文を導くという機能しか持っておらず、damit や auff das よりも多義的である。そして Subjektsatz, Objektsatz, Attributsatz, Adverbialsatz といった副文の下位グループは、主文との関わりではじめて決定される。さらに、同じ Adverbialsatz でも、目的、結果といった種類は、文脈から判断せざるを得ない¹⁰⁾。本稿では、目的文を抽出するにあたって、まず第一に接続詞 (das, auff das, damit) を基準にしている。しかし今述べたように、とりわけ目的文と結果文が容易に区別できない場合が少なくない。文脈から明らかに結果文とわかるものは、その時点で目的文から除外している。それでも判別しきれないものについて、これから検討していく。

ギリシャ語とラテン語の目的文

ルターにおける接続詞の das が多義的である一方、ギリシャ語やラテン語における接続詞の機能も、一義的には決定されない。従って、ルター聖書の語法を、ギリシャ語およびラテン語聖書の語法と直接結びつけるには、多くの困難を伴う。しかしながら、翻訳のテキストである以上、原典に拘束される面も多く、語法を判断する際、原典を参照することは、ある程度有効な手段であろう。

本稿では、すべての目的文について、網羅的に原典と比較対照したわけではなく、目的文か否か不確かな場合にのみ、原典を参照した。こうした作業の中で、目的を表わす形式としてギリシャ語聖書によく現われるものは、接続詞 ἵνα, ὥστε, そして不定詞である。ὥστε は結果文を導く接続詞であるが、目的を表わすこともあり、その点、ドイツ語の daß と似た立場にある¹¹⁾。また不定詞も、目的と結果双方を表わし得る。一方ラテン語聖書では、ἵνα, ὥστε 双方に対して接続詞 ut が用いられている。ut は目的文をも結果文をも導く接続詞である。ὥστε に対して ita ut (=so daß) が用いられる傾向が見られるが、ὥστε が二義的である以上、ita ut を結果文としてのみ解釈するわけにはいかない。ギリシャ語の不定詞に対しては、同じく不定詞が用いられる場合と、ut が用いられる場合とがある。少数例としては、否定を伴った ἵνα μὴ (lat. ut non), μὴ ποτε (lat. nequando), さらに πρὸς + τὸ 不定詞 (lat. ad + 動名詞) が目的を表わす形式として用いられている。

目的文とみなした文

以下に順次挙げていく例は、最終的に目的文とみなした文である。

- (6) Denn dieses volcks Hertz ist verstockt, vnd jre Ohren hören vbel, vnd jre Augen schlummern, Auff das sie nicht der mal eins mit den Augen sehen, vnd mit den Ohren hören, vnd mit dem Hertzen verstehen, vnd sich bekeren, das ich jnen hülffe. (マタイ13-15)
- (7) …Denen aber draussen widerferet es alles durch Gleichnisse, Auff das sie es mit sehenden augen sehen, und doch nicht erkennen, vnd mit hörenden ohren hören, vnd doch nicht verstehen, Auff das sie sich nicht der mal eins bekeren, vnd jre sünde jnen vergeben werden. (マルコ 4-11, 12)

上の文と類似した例は、ルカ 8-10, ヨハネ12-40にも見られる。ここで問題となっている副文（ルカ、ヨハネでは das で導かれる）は、旧約聖書（イザヤ 6-10）からの引用であり、主文との意味的なつながりは、あまり緊密でない。ギリシャ語では μήποτε および ἵνα μή が用いられ、ラテン語では nequando および ut non が用いられている。これらはすべて目的文とみなした。

- (8) …vnd seine Jünger tratten zu jm, das sie jm zeigten des Tempels gebew. (マタイ24-1)

上の文で、弟子たちが建物を指さす行為は、文脈を見ても、目的、結果二様に解釈される。ギリシャ語では不定詞、ラテン語では ut が用いられており、ここでも確たる決め手はないが、目的文とみなした。

- (9) …vnd brach die Brot vnd gab sie den Jüngern, das sie jnen furlegten,… (マルコ 6-41)

上の文と類似した例は、マルコ 8-6, ルカ 9-16にも見られる。ギリシャ語では、マルコが ἵνα, ルカが不定詞を用いている。ラテン語はすべて ut である。

- (10) …so steige er nu vom Creutze, das wir sehen vnd gleuben. (マルコ15-32)

上の文に対して、ギリシャ語では ἵνα, ラテン語では ut が用いられている。

- (11) Aber das wort vernamen sie nicht, vnd es war fur jnen verborgen, das sie es nicht begriffen,... (ルカ 9-45)

上の文に対して、ギリシャ語では ἵνα μὴ, ラテン語では ut non が用いられている。この箇所のギリシャ語に関して、岩隈（ルカ上, 132ページ）は結果を表わす不定法の代用とした上で、目的（「理解しないように」）とも解されるとしている。

これまで Amb. の例を挙げてきたが、次に挙げるのは直説法の例である。

- (12) VND als bald treib Jhesus seine Jünger, das sie in das Schiff tratten, vnd fur jm herüber führen,... (マタイ 14-22)

類例はマルコ 6-45にもある。ギリシャ語では動詞 ἀναγκάζω「強いる, 促す」に続く不定詞が用いられ、ラテン語では jubeo 「命ずる」(マルコ 6-45では cogō 「強いる」) に続く不定詞が用いられている。ドイツ語の場合、主文に相関詞 dazu を想定し、zu et. treiben といった表現を考えると、das 文が treiben から独立した Adverbialsatz と言えるかどうか、疑問が出てくる。ともあれ、接続法 führen (< fahren) も併存していることから、少なくとも結果文ではないと考えられる。

以上、das 文を中心として、統語環境のあいまいな副文の中から、文脈以外にギリシャ語およびラテン語聖書の語法を考慮した上で、目的文と判断したものの例を挙げた。これらの文に対して、ギリシャ語では接続詞 ἵνα, ὥστε および不定詞が用いられ、ラテン語では接続詞 ut および不定詞が用いられることが多い。

目的文とみなさなかつた文

以下に挙げていく例は、前節と同じやり方で検討した結果、目的文とみなさなかつた文である。前節では、ギリシャ語とラテン語に現われる語法が、比較的一定していたのに対し、ここでは多様な形式が現われる。そこで以下では、ドイツ語とともにギリシャ語とラテン語の文をも、できるだけ並記して挙げることにする。

- (13) Liebet ewre Feinde, Thut wol, vnd leihet, das jr nichts dafür hoffet,...

(ルカ 6 - 35)

πλὴν ἀγαπᾶτε τοὺς ἐχθροὺς ὑμῶν καὶ ἀγαθοποιεῖτε καὶ δανίζετε μηδὲν ἀπελπίζοντες.

verumtamen diligite inimicos vestros et benefacite et mutuum date nihil desperantes...

上の例において、ドイツ語の das 文に対してギリシャ語とラテン語では、否定詞を伴った分詞構文になっている¹²⁾。ちなみに、ルター訳に基づく現代語訳では wo ihr nichts dafür hoffet となっており¹³⁾、また別の現代語訳では ohne etwas zurückzuerwarten となっている¹⁴⁾。このようなことから、上例の das 文は付帯状況を表わす副文と考えられる。

- (14) Richtet zu, das ich zu abend esse,...

(ルカ 17 - 8)

ἑτοιμάσον τί δειπνήσω

para quod cenem

岩隈 (ルカ下, 78ページ) は、ギリシャ語の τί (不定代名詞) を関係代名詞の代用としている。ラテン語では、中性単数の関係代名詞 quod が用いられている。従って上例の das は、現代語の不定関係代名詞 was に相当する。この類の das はルターでは珍しくないが、essen や zurichten のヴェレンツとも関わって、das 文が目的文 (「夕食ができるよう、準備しなさい」) か関係文 (「夕食に食べるものを準備しなさい」) かあいまいになっている。

- (15) Wo wil dieser hin gehen, das wir jn nicht finden sollen? (ヨハネ 7 - 35)

ποῦ οὗτος μέλλει πορεύεσθαι ὅτι ἡμεῖς οὐχ εὐρήσομεν αὐτόν;

quo hic iturus est quia non inuenimus eum

上の例で、ドイツ語の das 文に対して、ギリシャ語では ὅτι (=daß), ラテン語では quia (=weil) が用いられている。岩隈はこの ὅτι に対し、類例としてヨハネ 2—18 を挙げている¹⁵⁾。ヨハネ 2—18 のルター訳は次のとおり。

(16) Was zeigstu vns fur ein Zeichen, das du solches thun mügest?

この das 文に対しても、ギリシャ語では ὅτι, ラテン語では quia が用いられている。そしてこの ὅτι 文に対して岩隈 (ヨハネ上, 29 ページ) は、「…事に関して、…とは、…からには」といった訳をあてているほか、理由や結果の意味にも解せるとしている。(16) の das 文には接続法が用いられており、工藤 (1985) では目的文に分類されている。(15) と (16) を比べた場合、「…とは」という訳語は (15) の方によりよくあてはまる。少なくとも (15) の das 文は、目的文以外のものに分類した方が妥当であろう。ちなみに、「…とは」「…なんて」と訳されるタイプのドイツ語が一般にもあることを、次の例で確認しておきたい。

O was ist der Mensch, daß er über sich klagen darf!¹⁶⁾

これまでは、Amb. が現われる文で、目的文とみなされなかったものを挙げた。以下では、直説法が現われる文を見ていく。

(17) …Vnd der Same gehet auff vnd wechset, das ers nicht weis...

(マルコ 4—27)

… καὶ ὁ σπόρος βλαστᾷ καὶ μηκύνηται ὡς οὐκ οἶδεν αὐτός.

...et semen germinet et increscat dum nescit ille

ギリシャ語の ὡς は、目的、結果、時間等、種々の意味を持っている。ここではラテン語の解釈どおり、dum (=während) の意味であろう (「彼が知らない間に」)。従って、上例の das 文も目的文とはみなされない。

(18) Vnd er ward wider zu rechte bracht, das er alles scharff sehen kundte.

(マルコ 8 - 25)

...καὶ διέβλεψεν καὶ ἀπεκατεστη καὶ ἐνέβλεπεν
τη λαυγῶς ἅπαντα

...et coepit videre et restitutus est ita ut videret clare omnia

ギリシャ語では、*καὶ*で文を並列的につないでいるだけである。ラテン語では *ita ut* で導かれ、結果文的になっている。文脈から考えても、上例の *das* 文は結果文と解される。

(19) Sihe der Geist ergreiff jn, So schreiet er als bald, vnd reisset jn, das er schewmet...

(ルカ 9 - 39)

上例の下線部に対して、ギリシャ語では *μετὰ ἀφροῦ*, ラテン語では *cum spuma* というように、前置詞+名詞 (=mit Schaum) で表わされている。これに対応するドイツ語の *das* 文は、結果的と考えてよからう。

(20) Aber jre augen wurden gehalten, das sie jn nicht kandten. (ルカ 24 - 16)

οἱ δὲ ὀφθαλμοὶ αὐτῶν ἐκρατοῦντο τοῦ μὴ ἐπιγνῶ-
ναι αὐτόν.

oculi autem illorum tenebantur ne eum agnoscerent

上の例で、ギリシャ語では動詞 *ἐκρατοῦντο* 「妨げられていた」+不定詞が用いられている。ラテン語では、接続詞を欠いた副文が動詞 *tenebantur* に続いている。ギリシャ語では、不定詞が動詞の(2格)目的語になっているのに対し、ドイツ語の *das* 文は、主文の動詞 *halten* から独立した *Adverbialsatz* であり、目的文(「気づかないようにさえぎられた」)か結果文(「さえぎられて気づかなかった」)である。ここでは結果文とみなした。

- (2) Da sprachen die Jüden, wil er sich denn selbs tödten, das er spricht, Wo hin ich gehe, da kund jr nicht hin komen? (ヨハネ 8-22)

上の das 文に対して、ギリシャ語では ὅτι, ラテン語では quia が用いられている。この das 文は、例文(15)(16)で述べた「…なんて」「…とは」の das 文である。

以上、das 文を中心に意味のあいまいな副文を、文脈およびギリシャ語、ラテン語の語法を考慮した上で、目的文あるいはその他へと分類する作業を進めてきた。ギリシャ語の ὅτι 文、ラテン語の ut 文に対応するルター訳は、文脈から見ても、目的文と解されることが多い。これに対し、目的文以外のものとみなされた文に対して、ギリシャ語、ラテン語は多様な形式を見せている。また、以上のような作業から、ルターが多義的な接続詞 das を多く用いているために、文の連関があいまいになっていることもわかる。

さて、以上のようにして抽出された目的文について、そこに現われる Modus の頻度を接続詞別に示したのが下の表である。

表 6 目的文における Modus

	Konj.	Amb.	Ind.
das	100	111	6
auff das	71	74	2
damit	3	0	0

ちなみに Lühr (S. 44) の統計を挙げると、目的文145個のうち、接続法67個、Amb. 74個、直説法 4 個であり、三者の割合は、本稿の調査結果とほぼ一致している。Lühr によれば、目的文を成り立たせるために、接続詞、接続法、話法の助動詞が互いに関連し合っている。従って、多義的な das と Modalität のあいまいな動詞がいっしょに現われるのは、わずかに目的文の23%であり、これに対して他の目的文では、das と話法の助動詞、もしくは直説法/Amb. と damit/auff das との組み合わせが現われる¹⁷⁾。しかし、表6に見られるとおり、福音書に限っては、das 文と Amb. の組み合わせが非常に多く、そこに現われる話法の助動詞

はごくわずかである。das 文を目的文と判断するのに多くの困難を伴うことは、先に見てきたとおりである。このように、Lühr の述べているような目的文をめぐる相補的な関係は、福音書に限っては見出し難い。むしろ、多義的な das 文には接続法が多く現われるという統計的な裏づけはない、という Flämig (1964, S. 20) の言葉が当を得ていると言えよう。

工藤 (1985) と本稿の調査結果から、ルター訳福音書における目的文では、時制の一致が守られていること、そして直説法がきわめて少ないことがわかる。これはすなわち中高ドイツ語の特徴である。これがやがて、現在形主文のあとには直説法が浸透していき、過去形主文のあとには接続法 1 式が多く用いられるようになる¹⁸⁾。導入の接続詞に関しても、das を除いては auff das を多用し、damit をほとんど用いていないという点で、ルターは現代語と大きく異なっている。ルターは da- を関係詞としても用いているため、機能的な面から見れば、damit よりも auff das の方が一義的であると言える。

まとめ

本稿では、接続法が必ずしも義務的ではないと思われる統語環境を扱った。実際、これらのうちのいくつかは、中高ドイツ語時代から新高ドイツ語時代にかけて、接続法に代わって直説法が浸透するという通時的な変化を被っている。こうした流れの中であって、ルターのドイツ語は、主語文、比較文、目的文の領域で、中高ドイツ語的な性格をまだ残している。次稿では、間接話法を中心に、今回取り上げなかったものについて検討したい。

注

- 1) 工藤康弘「ルター聖書における接続法の統語論的考察(Ⅱ)」山口大学「文学会誌」第37巻 1986, 37~50ページ。
- 2) 以下 Amb. と略す。Amb. I (Ⅱ) は、直説法と接続法 1 (2) 式の区別がつかない語形を示す。
- 3) 岩隈 (マルコ) 8 ページ。
- 4) Behagel S. 625ff.
- 5) Erdmann, O., Grundzüge der deutschen Syntax, Hildesheim 1985, S. 154 (1. Abteilung), Dal S. 147, Franke S. 363.
- 6) Paul (1968) S.300. Paul, H./Moser, H./Schröbler, I., Mittelhochdeutsche Grammatik, Tübingen 1975, S. 470.
- 7) Dal S. 204f., Paul (1968) S. 226.
- 8) Franke S. 352f. Franke が関係文として挙げている damit 文のうち、次の文は筆者は目的

文として分類している。

Oder was kan der Mensch geben, da mit er seine Seele löse? (マルコ 8-37. マタイ 16-26 もほぼ同じ)

- 9) cum の関係詞的な用法については Lewis, ch. T., An Elementary Latin Dictionary, Oxford 1975, p. 201 参照。
- 10) Flämig (1964, S. 17f.) は、同じ文が話者や聞き手の判断で、目的文になったり、結果文になったりする例を挙げている。また Flämig (1962, S. 150 注 1) は、目的文は主文から見て後時性を表わしており、その意味で結果文と類似していることを述べている。
- 11) Smyth, H.W., Greek Grammar, Harvard 1984, p. 509. Kühner, R./Gerth, B., Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache Teil II Bd. II, Hannover 1966, S. 504.
- 12) この分詞構文を直訳すれば、「少しも失望しないで」となる。しかし一般には、ルター訳に見られるように、「見返りを望まないで」と文脈にかなった解釈がなされている。岩隈(ルカ上) 84 ページ参照。
- 13) Die Bibel oder die heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments nach der Übersetzung Martin Luthers, stuttgart 1972, S. 80 (Das Neue Testament).
- 14) Die Gute Nachricht Das Neue Testament in heutigem Deutsch (Großdruck-Ausgabe), stuttgart 1976, S. 153.
- 15) 岩隈(ヨハネ上) 91 ページ。彼はここで、*ὅτι* を結果の意味に解釈する他の研究者の見解をも紹介している。
- 16) 橋本文夫『詳解ドイツ大文法』三修社 1979, 516 ページにおいて著者は、*daß* の特殊用法として、「…するとは」「…するなんて」の訳をこの文にあてている。なお例文は“Die Leiden des jungen Werthers” (Goethe) の冒頭の部分。
- 17) Lühr S. 44f.
- 18) Flämig (1962, S. 148f.) は、現在形主文のあとは直説法が一般的で、接続法 1 式がくることもあるとし、過去形主文のときは接続法 1 式が一般的であるとしている。Flämig (1964, S. 24) よれば、過去形主文の場合、ゲーテ時代には今日より接続法 2 式が多い。Jäger, S., Empfehlungen zum Gebrauch des Konjunktivs, Düsseldorf 1971, S. 34 では、目的文には直説法を用いることを勧めている。

参考文献

(本文および注で 2 度以上引用し、略記したものに限る。)

Behaghel, O.: Deutsche Syntax Bd. III, Heidelberg 1928.

Dal, I.: Kurze deutsche Syntax, Tübingen 1966.

Flämig, W.: Zum Konjunktiv in der deutschen Sprache der Gegenwart, Berlin 1962.

Flämig, W.: Untersuchungen zum Finalsatz im Deutschen, Berlin 1964.

Franke, C.: Grundzüge der Schriftsprache Luthers III, Hildesheim 1973.

Lühr, R.: Zur Syntax des Nebensatzes bei Luther. In: Sprachwissenschaft Bd. 10 (1985) Heft 1, S. 26-50.

Paul, H.: Deutsche Grammatik Bd. IV, Tübingen 1968.

岩隈直『希和对訳脚註つき 新約聖書』山本書店（＝マルコ福音書 1983, ルカ福音書〈上〉
〈下〉 1978, ヨハネ福音書〈上〉〈下〉 1982）

工藤康弘「ルター聖書における接続法の統語論的考察（I）」山口大学「文学会志」第36巻1985,
85～106ページ。

Eine syntaktische Untersuchung des Konjunktivs in der Luthebibel (III)

Yasuhiro KUDO

In dieser Abhandlung habe ich in den Evangelienbüchern in Luther's Übersetzung (1546) die syntaktischen Modelle behandelt, in denen der Konjunktiv nicht immer obligatorisch ist, und untersucht, ob in diesen syntaktischen Modellen nur Konjunktivformen, oder auch indikativische und modusambivalente Formen auftreten. Ich habe diesmal Subjektsätze, Vergleichssätze, irreale Vergleichssätze, bis-Sätze, ehe-Sätze und Finalsätze behandelt.

Subjektsätze

Der Forschungsgegenstand ist nur auf die Sätze beschränkt, die von alters her konjunktivisch sind (z.B. Es ist besser, daß...). Der in den Evangelienbüchern in Luther's Übersetzung häufig auftretende Subjektsatz "es begab sich, daß..." ist daher ausgeschlossen. Die Häufigkeitszahl des Modus ist die folgende :

Konj.	Amb.	Ind.
24	15	1

Die Tatsache, daß der Indikativ wenig ist, besagt, daß das Lutherdeutsch in diesem Punkt dem Mittelhochdeutschen nahe ist.

Vergleichssätze

Die folgende Tabelle zeigt die Häufigkeitszahl des Modus in den Nebensätzen,

die nach dem Komparativ mit "denn" oder "denn das" eingeleitet werden.

Konj.	Amb.	Ind.
17	0	2

Der Vergleichssatz im Lutherdeutsch funktioniert noch als ein syntaktisches Modell des Konjunktivs.

Irreale Vergleichssätze

Die Häufigkeitszahl des Modus ist die folgende :

Konj.	Amb.	Ind.
5	2	1

In zukünftiger Forschung ist es notwendig, mit umfangreicheren Materialien zu einem noch klareren Ergebnis der Statistik zu kommen.

bis-Sätze

Die Häufigkeitszahl des Modus ist die folgende :

Konj.	Amb.	Ind.
17	29	9

Mit Rücksicht auf die Tatsache, daß in bis-Sätzen der Gegenwartssprache der Indikativ vorherrschend ist, besagt die Mehrheit des Konjunktivs, daß das Luther-

deutsch in diesem Punkt noch auf einer älteren Sprachstufe steht.

ehe-Sätze

Die Häufigkeitszahl des Modus ist die folgende:

Konj.	Amb.	Ind.
1	3	16

Aus dieser Tabelle ist die Folge zu ziehen, daß ein ehe-Satz kein syntaktisches Modell des Konjunktivs mehr ist.

Finalsätze

Zuerst habe ich die mit "das", "auff das" und "damit" eingeleiteten Nebensätze herausgesucht. Aber diese Konjunktionen leiten nicht eindeutig Finalsätze ein. Vor allem "das" ist mehrdeutig, so daß man oft nicht urteilen kann, ob der das-Satz ein Finalsatz oder ein Konsekutivsatz ist. In dieser Abhandlung habe ich aus den obengenannten Nebensätzen die Finalsätze herausgesucht, indem ich nicht nur auf den Kontext, sondern auch auf den griechischen und lateinischen Urtext Rücksicht genommen habe.

Als Ergebnis ist die Häufigkeitszahl des Modus die folgende :

	Konj.	Amb.	Ind.
das	100	111	6
auff das	71	74	2
damit	3	0	0

In der Seltenheit des Indikativs und der Konjunktion "damit" ist das Lutherdeutsch von der Gegenwartssprache verschieden. Außerdem gibt es keine Tendenz, eindeutige Konjunktionen zu gebrauchen, um die Zweideutigkeit der modusambivalenten Formen zu vermeiden.